

セミの空の空

作・山本正典

登場人物

小泉多喜男（コイズミタキオ）線路の男

小泉雪子（コイズミユキコ）埋められる女

佐々木武（ササキタケ）埋める男

古村淳（フルムラジュン）線路の暇人

三田万智（ミタマチ）雪子の妹

父（チチ）雪子の父

母（ハハ）雪子の母

夜闇。葬式。舞台装置。小道具。衣装。演者の膚よりほかは、全て黒い色をしている。

多喜男と雪子の部屋。多喜男が一人、椅子に座り雪子の帰りを待っている。雪子が帰ってくる。多喜男の顔を見て微笑んだ。多喜男は雪子が何を決めたか、分かった。雪子は部屋の隅でこわばったまま、少しかすれた声で話し始める。

雪子 二酸化炭素

多喜男 うん

雪子 二酸化炭素

多喜男 うん

雪子 二酸化炭素

多喜男 お帰り

雪子 二酸化炭素

多喜男 お帰り

雪子 二酸化炭素

多喜男 お帰り

雪子 二酸化炭素

多喜男 お帰り

雪子 二酸化炭素

多喜男 お帰り

雪子 二酸化炭素

多喜男 お帰り

雪子 二酸化炭素

多喜男 お帰り

雪子 二酸化炭素

多喜男 お帰り

雪子 二酸化炭素

多喜男 お帰り

多喜男がいつもと変わらない、低くて優しい音で迎えてくれた。雪子は多喜男の傍に座る。

雪子 ただいま

多喜男 二酸化炭素

雪子 あ

多喜男 二酸化炭素

雪子 ふふ

多喜男 二酸化炭素

雪子 ねえ

多喜男 うん

雪子 二つめの月が光るねもうすぐ

多喜男 うん

雪子 今言うことじゃないかもしれないんだけど

多喜男 いいよ

雪子 今までありがとう

多喜男 うん

雪子 明日

多喜男 うん

雪子 明日 私いなくなると思う

多喜男 うん

雪子 すごいがんばろうとしたんだけど

多喜男 うん

雪子 多喜男も応援してくれてたのすごい嬉しかったんだけど

多喜男 うん

雪子 私いなくなると思う

多喜男 うん

雪子 でもなんか多喜男には生きててほしくて

多喜男 生きるよ

雪子 あの うん

多喜男 なに

雪子 私生きてた方がよかった 死んだ方がよかった

多喜男 生きてる方がいいよ

雪子 うん

多喜男 絶対

雪子 うん

多喜男 絶対だよ

雪子 でも分かんないよ 片方生きてて片方死んでた方がずっと幸せでいられるかもしれないよ

多喜男 うん

雪子 ごめん

多喜男 でも

雪子 うん

多喜男 生きてる方がいいよ 絶対

雪子 ごめん

多喜男 うん

雪子 ごめん

多喜男 うん

雪子 ごめん

電車が走る。電車の明かりが部屋の中にこだまする。多喜男と雪子は電車を眺めている。遠くを走っているのか近くなのか、よく分からない電車だった。

多喜男 電車走ってるね

雪子 私のこと葬式するの

多喜男 どうしようかな

雪子 うん

多喜男 雪子はどっちがいい

雪子 私は多喜男にしてもらいたくない

多喜男 そうなの

雪子 私 葬式は本当にどうでもいい人にやってもらいたい

多喜男 どうでもいい人は葬式なんてやってくれないよ

雪子 面倒なのはいいの 花を添えてもらうだけでも

多喜男 じゃあ雪子の葬式の時 俺いない方がいいね

雪子 結婚式の時にいてほしい

多喜男 結婚式もうしたよ

雪子 あれすごい嬉しかった

多喜男 うん

雪子 幸せだった

多喜男 うん

雪子 電車長いね

多喜男 そうだね

電車はずっと走っている。

雪子 え 電車すごく長いね

多喜男 すごく長いね

雪子 永遠だね

多喜男 永遠だね

電車はずっと走っている。次の日、雪子はいなくなつた。

三田万智の母の話。

母 二つめの月 二つめの月が完成したなら人間世界がどうなるか分かりますか 二つめの月は夜をなくすのです 人間の 人間世界の夜をなくすのです それは人間が眠らなくてもよくなるということなのです 二つめの月から放射されるビームは人間の身体に心地よく響いて脳みその疲れを癒します 眠る必要をなくすのです 人間世界の夜がなくなるのです そうなると人間になにが起きるでしょう 隣の誰かの顔を見つめます 眼と鼻と口があります もう少しじっと見てみると輪郭の産毛が見えてきます もっとじっと見てみ

ると毛穴の汚れや産毛についた埃が見えてきます 今までの人間であればここで終わりですが二つめの月に照らされた人間にはその先があるので 夜もなく疲れることもない人間は永遠に隣の誰かの顔を凝視出来るのです そうなると毛穴の奥の毛細血管やそこに流れる赤い血とそれを作る赤血球 さらにその奥のDNAのらせん構造 まだまだ凝視をしてゆくとやがて顔を突き抜けて 先月亡くなったその方のお母さんが見えてきます そうです 人間は目を凝らしすぎると死んだ人間の幽霊を見ることがさえも出来るようになるのです 二つめの月というのはそうやって 人間世界の一つ一つを明らかにするのです その人間世界で一番の大建造物 二つめの月がもうすぐ出来上がります 舞台は 完全に二つめの月のひかりだす三日前 すでに試しばかりが二度三度照射された地球 人間はぼつぼつと新しい世界を生きる者が出てきました

午前三時。どこか、高速道路の灯りがぼつんと見えるくらい山奥。佐々木武がスコップを土に立てて、穴を掘っている。雪子はその近くに座っている。雪子はじっと、傍らに置いてある雪子の頭部を見ている。頭部だけである。雪子の頭部は頭部だけなので、つまり死んでいる。つまりその雪子の頭部を見つめている雪子は死んだ雪子ということになる。

雪子 ねえ

武 うん

雪子 かわいいよね

武 うん

雪子 私

武 うん

雪子 私かわいいよね

武 うん こんなもん（足元の穴を見て）

雪子 うん そんなもん（武の足元の穴を見て）

武 じゃあ 葬式する

雪子 うん する

武は、雪子の頭部を抱える。穴へ持っていく。雪子はそれを眺めて歌をうたう。「ほたるのひかり」

雪子 ほーたーるのーひーかーりー…

武 なにそれ

雪子 え お葬式のテーマソング

武 え なんか違うよ

雪子 私歌ったよお葬式の時

武 え ほたるのひかり

雪子 うん ほーたーるのーひーかーりー なーぞーのーゆーうーきー…

武 なんか違うよ

武は、雪子の頭部を穴の中におさめる。武、立って、雪子と並んでその頭部を見つめる。

雪子 ねえ

武 うん

雪子 かわいいよね

武 うん

雪子 私

武 うん

雪子 私かわいいよね

武 うん

雪子 緊張してきた

武 なんで 二人だけじゃん

雪子 誰もいない

武 いないよこんな山奥まで来て

雪子 ねえ

武 うん

雪子 私の頭 かわいいよね

武 うん え なんで緊張してるの

雪子 だってお葬式なんて私小学生の時にやったきりだもん

武 誰の葬式

雪子 え

武 雪子の 小学生の時の葬式

雪子 むし

武 むし

雪子 うん 私の殺したむしの葬式

武 へえ

雪子 私の大事なむし

武 うん

雪子 ねえ 私かわいいよね

武 うん

雪子 ふふ ふふふ

武 なに

雪子 遺書書いたんだよ ふふ

武 え いつ

雪子 遺書書いたの ふふ

武 え いつ書いたの

雪子 死ぬ前 ふふ

武 うん

雪子 遺書書いたんだよ ふふ

武 え 死ぬ前って 死ぬ前のいつ

雪子 死ぬ前 ふふ

武 え いつ え 普通遺書って死ぬ前じゃん

雪子 死ぬ前 ふふ

武 え 普通遺書って死ぬ前じゃん

雪子 死ぬ前に書いたの

武 え 普通遺書って死ぬ前じゃん

雪子 読みたい

武 え 読みたい

雪子 ふ

武 え 読みたい

雪子 ふふふ

武 え なんて 読みたい読みたい

雪子 ここにないよ

武 え

雪子 置いてきちゃった

武 え ないの

雪子 ふふふ

武 なんてないの

雪子 武が頭しか持ってこなかったから

武 え

雪子 ふふふ

武 だって頭だけ持ってきてって

雪子 ふふ

武 頭のとこだけ持ってきてって雪子が言ったんじゃん

雪子 頭だけが遺書啜えてるわけないじゃん

雪子は自分がひどい人だと思った。

武 なんて

雪子 ふふ

武 なんて俺だったの

雪子 ふふ

武 え 俺のこと本当に好きなの

雪子 好きだなんて言ってない

武 でも葬式に俺を選んだよ

雪子 出逢ってまだ二日めだよ

武 じゃあ俺はなんなの

雪子は寝そべる。ちょうど雪子の頭部に自分の頭を重ねるように。武はじつとそれを見ている。

雪子 あれ 電車の音聞こえる

武 電車

雪子 がたんごとんてそうよ

武 え しないよこんな山の中で

雪子 がたんごとん がたんごとん

武 地面に埋まってるからかな

雪子は、上半身を起こして、雪子の頭部を見る。

雪子 がたんごとん がたんごとん

武 ほら

雪子 え これが聞いているってこと

武 これって言うなよなんか なきがらに

雪子 頭だけだとなきがらっていうか いしね

武 いし

雪子 いし ちゅうくらいはいし

武、土に膝をついて、雪子の頭部を覗き込む。

雪子 ふふ なに

武 キスしたげるよ

雪子 え ふふ やだよ

武 かわいそうに もう動けないとか

雪子 小指にね

武 え 小指

雪子 ふふ 左手 ふふふ

武 え 左手の小指

雪子 埋めたの

武 え 土に え

雪子 ううん 左手の小指に 遺書

武 え 小指に え 埋めたの

雪子 うん

武 え 遺書を 小指に遺書埋めたの

雪子 ふふふふ

武 ええ

雪子 小指に遺書を埋めたの

武 なんてそんな

雪子 ふふふ

武 なんてそんなダイナミックなの

雪子 ふふふ

雪子はまた歌う。ダイナミックな「ほたるのひかり」

「ダーイーナミック ダーイーナミック ダーイーナーミーイックー ダーイーナ…」

武は雪子の頭部の閉じた唇にキスする。雪子は歌うのをやめる。

武 なんか絶望だわ

雪子 え

武 絶望だな

雪子 絶望してるの 大丈夫

武 なんて読めないの遺書

雪子 ふふ 絶望してるの

武 絶望してるよ

雪子 だって私

武 絶望

雪子 ばらばらになったから

武 ああ

雪子 遺書なくしちゃった

武 絶望

同じ時間の、線路。多喜男が枕木の上を歩いている。棒状の、機械のようなものを持っている。それは持ち手にスマホのようなパネルがついている。パネルからコードが伸びて、棒を二度三度回転し、先端に繋がっている。多喜男はその棒を持って、先端を前方の足元にかざして、白杖を扱うようにして歩いている。一定間隔で街灯の明かりがかすめるだけの夜である。街の音は無く、空の上の遠くから、「ゴン ギン ギン」と、建設現場のような音が響いている。二つめの月を造る音である。多喜男がしばらく歩くと、線路の上で古村淳が立っていた。多喜男は、淳がじっとこちらを見ているような気がして、避けるように通り過ぎた。

淳 月がきれいだね

多喜男はふいをつかれた。

多喜男 うん

淳 二つあるけど

多喜男 うん

淳 誰か探してるの

多喜男 え

淳 知ってる ここ線路っていうんだよ

多喜男 うん知ってる

淳 人の入っちゃいけないとこなんだよ

多喜男 こんな時間なら大丈夫だよ

淳 こんな時間でも電車走るよ

多喜男 え 夜中に走るの

淳 掃除するんだよ

多喜男 掃除

淳 なんか最近すごいでしょ自殺する人

多喜男 うん

淳 ホームからとか線路の途中からとか ぴよっぴよってめっちゃ皆利用してるじゃん 電車 自殺で

多喜男 うん

淳 なんかも皆自殺すぎて一人二人でとまなくなっただじゃん電車

多喜男 え そうなの

淳 そうだよ

多喜男 え 日本やばいね

淳 いや引っかけたらとまるよ

多喜男 え 引っかけたらとまるの

淳 うん危ないから

多喜男 日本やばいね

淳 だから夜中に走ってレールの上掃除してるんだって 俺詳しいでしょ

多喜男 詳しいね

多喜男は、淳を適当にあしらって線路を先へ進もうとするが、淳が追いかけてくる。

淳 俺最近めっちゃ電車見てるんだよ暇すぎて

多喜男 そうなんだ

淳 だからあんたみたいな人も見たことあるよ

多喜男 俺みたいなの

淳 あんた誰か探してる人でしょ

多喜男 え

淳 誰 俺見てるかもしれない暇すぎて

多喜男 え 妻

淳 妻 え 電車飛び込んだの

多喜男 いや うん

淳 うん

多喜男 分かんないんだよ

淳 え

多喜男 なんか警察に言われたんだけど 妻の免許証が線路に落ちてたよって

淳 じゃあ飛び込んだね

多喜男 いや あの

淳 うん

多喜男 分かんないじゃん 分かんないっていうかしっくりこないじゃん顔とか見ないと

淳 死に顔

多喜男 死に顔でも生きた顔でもしっくりこないじゃん自分で見とかないと

淳 あんたガッツあるね

多喜男 え

淳 そんなの普通確かめたくないじゃん

多喜男 あんたも誰か探してるんじゃないの

淳 俺

多喜男 あんただってここ線路だよ真夜中の

淳 俺大丈夫死んでるから

多喜男 え

淳 俺 飛び込んだ人 走ってる電車

多喜男 そうなの

淳 だから死んでると思うんだけど 多分

多喜男 そうか

淳 え 俺死んでるよね

多喜男 俺人見知りだからよく分かんないよそういうの

淳 そうか

多喜男 まあ

淳 うん

多喜男 俺人見知りだけどなんかあんたとは普通に喋ってるし そういう意味では生きてる人の感じはしない
んでない

淳 ううむ

多喜男 分かんないけど

淳 ううむ

多喜男 人に聞くなよ自分が死んだかどうか

淳 うん

山の中。雪子は山のどこか遠くを見つめているように、武には見える。その姿が今にも闇にまぎれてしまいそうで、武はどきどきしている。

武 絶望

雪子 二酸化炭素

武 絶望

雪子 二酸化炭素

武 なに

雪子 二酸化炭素

武 なんだって

雪子 二酸化炭素出して

武 え

雪子 二酸化炭素

武 二酸化炭素だけじゃないよ

雪子 二酸化炭素

武 吸った空気より吐いたの方がちょっと多たってだけでしょ二酸化炭素が

雪子 二酸化炭素

武 なに

雪子 二酸化炭素

武 なんだって

雪子 二酸化炭素

武 絶望

雪子 二酸化炭素

武 絶望

雪子 二酸化炭素

武 ふふ 絶望

雪子 二酸化炭素 ふふ

武 ふふふ

雪子 二酸化炭素

武 絶望

雪子 二酸化炭素

武 ふふふ

雪子 二酸化炭素

武 俺のこと好き

雪子 二酸化炭素

武 好きってことでいい

雪子 二酸化炭素

武 二酸化炭素

雪子 私もう出してない

武 あ

雪子は雪子の頭部に視線を移していた。

雪子 二酸化炭素

武 ふふ 絶望

雪子 二酸化炭素

武 絶望

雪子 二酸化炭素

三田万智の家。万智が仕事から帰宅すると、リビングで、父と母が椅子に座って待っていた。父と母は、万智
17
がリビングに入ってくるなり顔をくるりと万智に向けた。

万智 え なに

父と母 …

万智 え 電気つけないの

父と母 …

万智 え 二人並んでどうしたの

父と母 …

万智 なに え ただいま

父と母 …

万智 え ごめん遅くなって

父と母 …

万智 私お風呂入るね

母 万智

万智 うん

母 お帰り

万智 うん え どしたの

母 万智

万智 うん

母 お話があるの 座って

万智 え うん お風呂入ってからでいい

母 すぐにお話したいの ね 座って

万智 え お風呂入ってからじゃだめ ちょっとゆっくりしたい

母 お願い 今お話しさせて

万智 私仕事で疲れてるんだけど

母 疲れてないわよ二つめの月に照らされているのだから

万智 あの 気持ちが 心がね気持ちが滅入ってるの

母 滅入らないわよ二つめの月に照らされてるのだから

万智 そんなの人によつて違うじゃない

母 ねえお願い座って

万智 なんで電気つけないの

万智、壁の電気のスイッチを入れようとするが、スイッチがくり抜かれていて、無い。

万智 え なんで お母さん え スイッチないよ

母 万智

万智 電気のスイッチ え なんで穴あいてるの お母さんなんで電気のスイッチくり抜いたの え これくり抜いてるんだよね

母 万智 座って

万智 お母さんどうしたの

母 お父さん

父 ごめんな

万智 え うん

父 ごめんな

万智 え お父さんくり抜いたのこれ

父 こんなまさか

万智 うん

父 こんな不便な身体だったとは

万智 え

母 万智

万智 うん

母 お父さんはね 人間になって初めて気づいたのよ

万智 え なんの話

母 お母さんもそう お父さんもお母さんも人間の身体になってやっと分かったの ああ 人間は空も飛べず土にも潜れない ただ地べたを這いずり回るだけのむなし生き物だったんだって

万智 なんの映画それ

父 万智

万智 私疲れてるんだけど

父 ごめんね

万智 だからなんの話

父 お父さんとお母さんはね セミになったんだよ

万智は、暗がりの父と母に目を凝らした。

父 ああ なんていうのかな セミがお父さんとお母さんになったといえいいのかな セミもお父さんとお母さんになったし お父さんとお母さんもセミになったし 半分ずつこになったのかな

母 半分ずつですよ 半分ずつこ

父 半分ずつこかな 半分ずつこだね

万智 お父さん え どうしたの

母 ごめんね万智突然こんなことになって

万智 え なってないお母さん なってないなってないお母さん ねえほんとにながあったの

万智は椅子に座った。

父と母 座ったね

万智 え(半立ち)

父と母 ああ うそうそ怖くない怖くない

万智 お母さんほんとにやめて

母 ごめんね

万智は、母の頭部になにかくつついているのを見つけた。

万智 なにこれお母さん

母 え

万智 お母さん頭になんかくつついてるよ

母 ふふ 見てみる

万智 え これなにお母さん

万智は、スマホで母の頭を照らす。母の頭頂部にセミがくつついている。万智は身体をこわばらせた。

万智 ひ

母 触っちゃだめよ

万智 お母さん セミ 頭にセミついてるよ

父 お父さんもだよほら

万智 え もうなんでなんでとつてとつてそんなの え家ん中に入れないでよ飛んだらどうするの

母 飛ばないわよ

万智 飛ぶよ

母 だってこれお母さんの本体だもの

万智 もうやめてそれももう電気つけようよもうやだよ

万智は電気スイッチのあった跡を指でカリつと。

万智 え なんでスイッチくり抜いたの電気どうするの

母 万智

母が立った。

万智 立たないで

万智は両手で母を制止しようとし、それなのに腰がひけている。今、特に混乱しているわけではない。ふつつと怒っている。普段はセミを頭に載せて夜中まで帰りを待つなどしない母と父である。だから不気味であることと、夜中だということ、声を張り上げるのは意識して避けている。

母 電気がないと見えない

万智 ちょっと お願い 私ほんとに苦手なの虫 セミ お願い

母 万智 お父さんとお母さん今万智のこと電気がなくても見えてるよ ねえ(首を傾げて)

父 ねえ(首を傾げて)

万智 首を傾げないで動かないでお願い

母 なんででしょう

万智 え

母 お父さんとお母さん なんで電気なくても万智が見えてるんでしょう

万智 ごめんなさい これからちゃんとその日のうちに帰るから会社に言うからほんとにごめん 心配かけて
ごめんなさい

母 万智

万智 うん

母は万智に近づいていく。

万智 もうもうもう無理無理無理無理無理無理無理無理無理

母は少し、表情を歪めた。

母 会社なんてもう行く必要のないよ じきに二つめの月の本当びかりが始まるのだから

万智は母を見ることが出来ない。

母 行ってきます

父 行ってらっしゃい

母はリビングを出ていく。

万智 え お母さん え お母さんどこ行ったの

父 お母さん お腹が空いたのかな

万智 え

父 お腹が空いたんだね

山の中。武と雪子はそれぞれ、何かを探している。真っ暗で、武はあんまりその場を動けない。

武 花って 意外とないね

雪子 あるよ

武 真っ暗で分かんないよ

雪子 あるよ ほら（いつの間にか雪子の手には花）

武 え

雪子 花

武 え どこ

雪子 こっち

武 俺見えてないんだからさ

雪子 武見えてないの

武 いや俺普通の生きてる人間だよ

雪子 私いなくなったら武どうするの

武 え

雪子 真っ暗な山の中で一人になるよ

武 え いなくなるの

雪子 だってお葬式ってそういうことだよ

武 え ちよつと ちよつと待って雪子

雪子 うん

武 そんなだめだろ わがままだろ 俺 あの 普通の生きてる人間だよ

雪子 私 死んだ人間よ

武 こんな山の中で俺普通の生きてる人間だよ

雪子 死んでからくらいわがままさせてよ

武 そんなこと言うところくな成仏出来ないよ

雪子 成仏出来るよ

武 成仏出来ないよ

雪子 成仏出来るよ

武 成仏出来ないよ

雪子 ふふ

武 出来ないよ

雪子 成仏ってなんだろね

武 なんだろねじゃないよ

雪子の声が聞こえない。虫の声と木の声は聴こえる。

武 え

雪子の声が聞こえない。

武 え 雪子 なんだろねじゃないよ

雪子の声が聞こえない。

武 え 雪子 雪子なんだろねじゃないよ

雪子の声が聞こえない。

武 雪子 雪子 ねえ なんだろねじゃないよ

雪子の声が聞こえない。

武 わ ねえ 成仏やめて 雪子 わ え なんだろね なんだろねええ

雪子の声が聞こえた。それは近くにいるのか遠くにいるのか、武には分からない声だった。たとえるならそれは、マイクを通した声だった。

雪子 なんか感じ方がね

武 ああ(驚いた)

雪子 感じ方が 生きてる時の五感だったところがね

武 五感 雪子

雪子 うん 見たり聞いたり触ったりとかのね

武 うん え 成仏終わったの

雪子 もうそこじゃないとこで今 全部感じてるから この山ん中もなんか目んたまじゃないとこ使って見えてるからね 例えば私 立つでしょう

武 うん え どこに立ってるの

雪子 私の「立つ」と武の「立つ」はね もう違うの

武 うん

雪子 死んだ人はね まず設定しなきゃいけないの この地球の重力の核を探してそこに立つように設定しなきゃいけないの

武 設定

雪子 でないとたちまち地球に置いてけぼりにされるの 宇宙の迷子になっちゃうの 私が宇宙で独りぼっちになるの嫌でしょ

武 嫌だよ

雪子 そうよ だから設定するの でもこのままだと今度は地球の重力の核にどんどん落ちちゃうの 地面埋まっちゃうの だから今度は地球の核から大体6400キロメートルで地上に出てこの山の標高が大体220メートルくらいでって設定するの 私足し算するの

武 俺もう難しくくて分かんないよ

雪子 私今 武まで4メートル10センチ

武 え(あたりを見回す)

雪子 3メートルちょうど(武に近づきながら)

武 え え

雪子 2メートル 1メートル

雪子は武のすぐそこにいた。武は雪子の影は見えていた。でも雪子は草や土を踏む音が無かった。武は雪子が異形のものに思えてとても怖くなった。雪子は武の頬に花を近づけて、触れさせた。

武 雪子 成仏終わったの

雪子 武はいつまで生きてるの

武 え

雪子 もうすぐ二つめの月の本当びかりが始まるよ

武 俺たぶん大丈夫だよ 試しびかりの時だってなんにもならなかったもん

雪子 宇宙でもなんでも見えるようになるよ

武 雪子は見えちゃったの

雪子 私はね

武 うん

雪子 花

武 うん

雪子は、花を雪子の頭部に添えた。

線路。多喜男と淳が歩いている。多喜男の持っている機械の棒から「びしゅびしゅーん」とかっこいい音が鳴った。多喜男はかたまった。棒の先端に、小指くらいの形のがくっついていた。

多喜男 あ なんかくっついてる

淳 うわほんとだ

多喜男 なにこれ

淳 え 妻の身体の一部じゃないの

多喜男 え これが

淳 だってこの棒登録したDNAとおんなじやつがくつつくんでしょ

多喜男 うん JRの人が貸してくれた

淳 だったらこれ妻の身体の一部だよ

多喜男 え なんか干からびてないこれ

淳 ちょっと明るいところ行こ明るいところ

多喜男は動けない。淳は多喜男を引っ張って、明かりの下へ歩かせる。先端についたものじつと見てみると、木の枝であった。

多喜男 え これ木の枝じゃない

淳 ほんとだ木の枝だ

多喜男 え この機械使い方あってるの

淳 良かったね

多喜男 え

淳 え 木の枝で え 良いんだよね

多喜男 え うん

淳 え 良くなかった

多喜男 え うん

淳 え 良かったの良くなかったの

多喜男 え うん

淳 え 良かったの良くなかったのどっち

多喜男 いやこの機械壊れてるのかなって

多喜男のふるえに、淳は自分の家族が自分の身体を見つけた時のことを想像させた。

淳 あんたさ

多喜男 うん

淳 死んだ人間の立場で話すとよ

多喜男 うん

淳 あの死んだっていかか多分死に（たぶんじに）でね 多分死にの立場で話すとよ多分死にでね

多喜男 うん うん

淳 こういう時はね 悲しむか喜ぶかしてほしいでしょ普通死んだ人はね

多喜男 うん

淳 え 悲しいの嬉しいの いやあの嬉しいっていうか嬉しいってのはないわ ないよね

多喜男 うん

淳 あの ホツとするね ホツとする あんた今悲しいのホツとしてのの

多喜男 うん

淳 どっち

山の中。雪子は花を見つめてる。線路の多喜男は木の枝を見つめている。いつかの雪子が多喜男の中で重なる。

雪子 私はね 花

武 え うん

多喜男 あ

淳 なに

多喜男 この枝さ

淳 うん

多喜男 血がついてるとかかな

淳 ち

雪子 私は花

武 なに

多喜男 血 妻の血 ほらこの黒いの

淳 ああ はねられた時に飛び出たやつだ

雪子 私は花

多喜男 うん

武 なんなの

淳 ああそれは それはおんなじDNAだわ

多喜男 なんか

淳 うん

木の枝は細く枯れている。多喜男は跳ね飛ばすように木の枝の落ちていたところを探し出す。思うように身体が動かない。ふと、多喜男は昔、雪子が「ダイエツト出来ない」と悲しんでいた姿を思い出した。多喜男は木の枝を持ったまま、ただ、線路の先へ、よろよろと歩いた。少し離れた場所ではがんで、泣いた。

三田万智の家の近くの公園。一本の大きな木が建っている。母がその木の膚をびちよびちよ舐めていた。万智は母を追って、その音にたどり着いた。聞いたことのない音は、どこか途方もない響きをしていた。

母 びちよびちよびちようりびちよびちようり…

万智 お母さん

母 びちようびちようびちようびちようびちよびちよ

万智 お母さん何やってるの

母 何してると思う

万智 じゅ

母 びちよびちよびちよびちよ

万智 樹液をすすっている

母 万智さんねん

万智 何やってるの

母 クワガタをすすってました

万智 お母さん

母 万智 セミはね 人間が思ってるより生態系の頂点よ セミは爪を隠すのがうまいから

万智 お母さん何言ってるの

母 セミが本当はあなた達より偉いって言っているのよ

万智 どうしたのお母さん

母は何かを万智の足元へ放る。

万智 え

母 あなたもすすってみなさいよ

万智 なにこれ

母 私たちなんでも食べるわよ クワガタでも蜘蛛でも蜂でも魚でも鳥でも猿でも人でもクジラでも あなたたちは私たちが地面に転がっていたらそれで死んだと思っただけでしょう

万智 ははつきりと母の顔を見た。夜闇の中だからか、母は泣きそうだった。

母 あれはね 私たちの二つめの抜け殻

万智 抜け殻

母 ねえ人間は

万智 え

母 人間は 死んだらどうなるの 死んだだけ 死んだだけでおしまい

万智 は母につかみかかる。母の頭の上のセミを剥がそうとする。母は抵抗する。

母 あ 待って 万智 万智 待ち お母さんまだあんまり人間に慣れていないのよ 慣れていないのよ 待って 万智 万智

万智 は、母の頭の上のセミをとった。母は力なくくずおれた。父が立っていた。

万智 え お母さん

父 万智 早くお母さんの頭にセミを戻しておあげ

万智 え なに ほんとに

父 早く 万智 お母さん死んじゃう

万智 うそ え お母さん

万智、母の頭にセミをとりつける。母は動かない。

万智 お母さん セミ セミついたよ頭の上にいるよ ねえお母さん

父 万智

万智 え お母さんごめんなさい お父さんごめんなさい え なんで ごめんなさい

父 万智 話があります 家に入ってください

万智 え お父さんなんで なんで敬語 お父さん ごめんなさい

父 万智 家に入ってください 今すぐ

万智は母の胸に手をやり、悲しみ方が分からない。とりあえず、泣いていいことは分かった。

線路では、多喜男が泣いていた。

山の中では雪子が歌っていた。「ほたるのひかり」多喜男の泣き声にあわせてあげているようだった。

雪子 ほたるのひかり なぞのゆき

ふみふみマツサージ あなたのとくいわざ

てがみをかさねて わらわれて

でもあなたかかさず おへんじえもじつき

ほたるのひかり なぞのゆき

ふりむきわたし わかれゆく

線路。多喜男は泣いて、叫んだ。

多喜男 雪子

淳 ああ うん

淳は、二つめの月を見た。

淳 いい名前だね

名月だった。

淳 いい名前

山の中。木が生い茂っている中、雪子の頭上はぼかんと空が開けている。雪子はそれを見ている。武には雪子だけ、月の光を浴びているように見えた。

雪子 ねえ 私のこと埋めて

武 うん

武、スコップを持って雪子の頭部に土をかけ始める。

武 これ埋めたらさ もう葬式終わり

雪子 カチ

武 え

雪子 カチ

武 なに

雪子 ふふふ

武 「カチ」ってなんなの

雪子 ごめんなさい

武 なに

雪子 私もう設定した人がいるの

武 え

雪子 カチ

武 誰に設定したの

雪子 今 武のうしろに

武 え（振り向く）

雪子 武のうしろに木星が見えるよ

真っ暗になる。夜の山はずっと真っ暗だった。それでも真っ暗になったのは、雪子の気配が消えたからであった。

武 え 後ろに木星あったらなんか 死ぬんじゃない俺

誰もいない。

武 雪子

誰もいない。

武 俺は雪子が俺のこと好きじゃなくてもいいよ

誰もいない。

武 だって雪子は雪子の最期に俺を選んでくれたよ それは多分 好きよりももっとずっと もっとずっと

誰もいない。

武 好きってことだよ

誰もいない。

武 雪子 え

誰もいない。

武 え 雪子 本当にいないの ゆ

誰もいない。

武 ゆきこ

武は暗い中、手探りで、早歩きしたいけど中々出来なくて、躓きながら雪子をもとめる。

線路。多喜男は枕木に突っ伏したまま。

淳 ゆきこって いいなまえだね いいなまえ 俳句じゃん 行こうぜ

多喜男、突っ伏したまま。

淳 あの 刺されるよ 蚊とか

多喜男、突っ伏したまま。

淳 あ俺さ ずっと電車見てて気づいたことあってさ 蚊に刺されないんだよ俺 普通じつとしてたら刺すじゃん 蚊 でも俺じつとしてても誰も刺してくれないの こういう時にああ俺死んでるのかなって思っちゃうよね

多喜男、突っ伏したまま。

淳 え 探しなよ妻のこと 木の枝に血付いてたのっらいけどさ あんたさ こんな線路の隅っちょの方で一人ではらばらになってる妻も相当つらいと思うよ俺

多喜男、突っ伏したまま。

三田万智の家。父が椅子に座っている。万智はリビングの入口に立って、父の影を見ている。廊下の電気をつけようか迷ったけれどやめた。頭にセミを乗せているし。私まだ泣いてるし。

父 万智 今からつらいことを言うよ

万智 うん

父 お母さんは本当にセミになったよ

万智 うん

父 なぜだか分かるかい

万智 分かんない

父 雪子だ

万智 え お姉ちゃん お姉ちゃん何かしたの

父 万智は幼かったから覚えてないかもしれないけれど 雪子が昔 セミをたくさん捕ってきたんだ

万智 そんなのちびっ子はみんなやるよ

父 たくさんていうのがね万智 ほんとうにすごいたくさん あの小さな虫かごに200匹

万智 に…

父 お父さん雪子が廊下に並べて数えてたのを聞いてたから間違いないよ

思い出の雪子、一匹一匹に名前をつけながら、セミの死骸を家の廊下に並べる。セミの死骸は真っ白な花の形をしている。以降、雪子は名前を呼ぶ毎に、花の形をしたセミを、世界のあちこちに置いてゆく。舞台に点々と白。

雪子 じゅんきち はなえ とくたろう まいける さくら こうのとり ゆうきち とまと そらのえだ
ますよし おのき ふきのとう シャーペン ふらい じんせい こみち てのひら ほのか ぼたん ひ
まわり たんぼぼ もぐら さるとび さばく

万智 なにしているのお姉ちゃん

雪子 名前をつけてるの

万智 みんな死んでるのに

雪子 そうよ

万智 死んでるのに名前をつけるの

雪子 お葬式してあげるの

万智 お葬式

雪子 お名前呼んで お花を添えて おうた歌って 土に埋めてあげるのよ

万智 お姉ちゃん

雪子 ねえ 万智も一緒にやろう

万智はかすかに思い出す。思い出の雪子はずっとセミの死骸を並べている。父が話し始め、リビングの現実意識が戻っても、雪子はずっと名前を呼び続けている。

父 覚えていないかい

万智 え

父 万智も見ているんだよ

万智 そんなに虫かごに入るわけじゃないじゃない

父 入るんだよ折り重なって

万智 折り重なって

父 お父さん思わず雪子に叫んでしまったんだ「呪われるぞ馬鹿」って

万智 そんなことで

父 そんなことってなんだ 200匹の同胞をすし詰めに殺されたセミの気持ちが万智に分かるかい

万智 ごめんなさいお父さん

父 大丈夫だ万智 お父さんはね

万智 はい

父 お父さん実はうそのセミだよ

万智 え

父 ほら セミとれるよ

父は頭のセミをとった。

万智 お父さん うそセミだったの

父 お母さんあんなことになっちゃったからお父さん慌ててありあわせのセミの死骸を頭に乗つけたんだよ
案外騙せるもんなんだね お母さん生前からアホだったしな

万智 生前でお父さん お母さんは死んだの

父 お母さん 死んだのかな

万智 分かんないよ

父 死んだのかな

父は泣いている。雪子の名前を呼ぶ声が次第に大きくなってゆく。万智はこの名前を呼ぶ声は200で終わることを知っている。終わったなら、どうなるのか。

父 死んだのかな

雪子 さな

父 死んだのかな

雪子 よぶこえ

父 死んだのかな

雪子 ならあく

父 死んだのかな

雪子 らんかん

父 死んだのかな

雪子 とびうお

父 死んだのかな

雪子 うまれ

父 死んだのかな

雪子 さいわい

父 死んだのかな

雪子 ん

父 死ん…ブン…

父は突然激しく痙攣して椅子ごと倒れた。動かなくなった。窓の外で、「ふふ」とかすかに母の声があった。

万智 おと

父 …

万智 おとうさん え おとうさん

万智、父の脈をはかる。

万智 脈がないと思う

雪子は思い出を抜け出して、セミの死骸の花を世界に置き続ける。

線路。多喜男はまだ突っ伏している。

淳 ええ死んでるじゃん もうこれ死んでるじゃんって俺思ってたさ だって集中すると地面が透けて見えるよ うになってんだよ うっかりすると地面全部星空に見えるんだよもう地球貫通し過ぎて透けすぎて それで閃いてさ 普通は今夏の星座しか見えてないでしょ でも地面透けたらこれ オリオン座とか冬の星座見えるんじゃないかねって思ってたさ ググっと目を凝らしてさ でもあれ ないぞ オリオン座ないぞって探したらさ あったの 上に 普通に上の星空に瞬いてるの え なんぞって冬の星座夏に見えてるじゃん 地球やべえって思ってたんだけどさ あれ夜中の三時とかだと夏でも冬の星座見えるんだね ほら今も 見てみなよ 俺多分死にでさ 結構落ち込んだ夜もあったんだけどさ あのオリオン座見てるの今世界中で俺だけじゃねって思ったらさ なんか一人ぼっち同士親近感わくよね ほら 見てみな ほら ね いい加減ほら 掃除の電車来るよ ほら ほら

多喜男は突っ伏したままなので、淳、多喜男を無理やり枕木から引っぺがす。「見てよ、見てよ、ほら、見ろって」多喜男抵抗する。それでも淳引っぺがそうとして、多喜男の顔を両手で捕まえて、目をこじ開けて無理やり星空を見させる。

淳 ほらあのダブリューのやつ

多喜男 え

淳 ほらあのダブリューのやつだって

多喜男 あれオリオン座じゃないよ

淳 え

多喜男 あれカシオペア座だよ

淳 え あれオリオン座じゃないの

多喜男 カシオペア座だよ

淳 え 俺のオリオン座どこ

多喜男 カシオペア座だよ

星空がとてもきれいに広がっていた。多喜男はたまらなくなつて、淳に抱きつく。

淳 俺の オリオン座

淳、多喜男に抱きつく。二人は抱き合つたまま線路をごろごろはしゃぐ。砂利と枕木がごつごつ痛い。多喜男は気にしない。淳は痛みを感じられない。二人とまつて、星空を眺める。多喜男は二つめの月の効果でいつもよりたくさん星が見える。淳はプレアデス星団が200くらい星の集まりだと目ではつきりと分かるくらい遠く繊細に見えている。多喜男、淳に顔を向けると、暗がりの中、淳の右腕に点が見えた。

多喜男 あれ

淳 え

多喜男 あんた蚊とまつてるよ

淳 え どこ

多喜男 右腕のところ

淳 え

淳、右腕を見た。蚊がとまっている。健気だ。

淳 俺 死んだんだよね

多喜男 あんたさ

淳 うん

多喜男 生きてるんじゃないの

随分無責任なことを言うやつだ。淳は思った。蚊はじつと、淳の何かを吸っている。こいつ、死体から死んだ死を吸っている。淳は左手を構えた。そうだ、そうしてやろう。構えた左手で、右腕の蚊を潰した。潰れた蚊は、淳にはとても潰れているように見えた。左手でその遺体をつまみ、草陰に墓でも作つてやろうと思った。淳は、草陰を探した。多喜男は、蚊の死骸をつまんでうろつく淳が、死んだ人に見えた。やがて淳は丈夫な名も知らない草の根元に、蚊を葬った。

多喜男は、死体が死体を葬った、と思った。

山の中。武は雪子を求めてさまよっていた。と言えば聞こえは勇ましいが、実際は暗闇の中、そろりそろりと、そんなに移動できずにいた。

武 雪子 もういいよ 出てきていいよ ごめんよ 雪子 ごめんよ 雪子 ごめんよ 雪子 雪子

その時、近くで音がする。聞いたことのない音だった。

母 びちよびちよびちようりびちよびちようり…

武 雪子

母 びちようびちようびちようびちようびちよびちよびちよ

武 雪子 何やってるの

母 何してると思う

武 お

母 びちよびちよびちよびちよ

武 おしっこ

母 樹液をすすってました

武 じゅ

母 あなたこんな山中で何してるの

武 え 雪子が連れてきてくれたんじゃん

母 こんなところに一人ぼっちであなたくるくるばあになりきたの

武 え 雪子がお葬式してほしいって言ってくれたんじゃん

母 わかったあなた二つめの月から逃げてきたのよ

武 お前誰だ

母 私雪子を探しているの

山の中から出て、自分が街に帰る想像が出来なくなっていた。武は走った、走った。目がまわって、その場に倒れ込んだ。落ち葉も枯れ枝も、何もかもどうでもよかった。腐った土の臭いだけが頭に響いて、武は泣いていた。武ははっと予感がした。空を見上げて、木々の開けた感じが、どこか懐かしいものだった。武は寝転がった自分の頭の左上にある。少しこんもりと膨れた土に触れた。少し起きて、それに触れた。

三田万智の家。万智は目を見開いていた。父がオキアガッタからだ。

万智 お父さん 大丈夫

父 万智

万智 うん

父 大丈夫だよ

万智 びっくりしたよ

父 ごめんね

万智 このまま死んじゃうんじゃないかと思ったよ

父 大丈夫だよ万智

万智 ほんとに死んじゃうのかと思ったよ

父 大丈夫だよ もう死んでるから

万智 え

父 万智 お父さん死んでるよもう

万智 え 立ってるよ

父 だからね万智 死体が立ってるよ

万智 ど え お父さん

父 ごめんね万智一人を残して

万智 私一人じゃない 一人じゃないよお父さんいるよ

父 死体のお父さんがね万智は一人だよ

万智 一人じゃない一人じゃないよ

父 万智 人はどこでなにをしていたって一人だよ

万智 一人じゃない一人じゃないよ

父 一人なんだよ

万智 お父さんいるよ

父 万智がまだ気づいてないだけで万智ははじめから一人だよ

万智 みんないるよ

父 だのにどうしてお父さんは万智の花嫁姿が見たかったのだろう

万智 お父さん

父 どうして三千億塵点劫（さんぜんおくじんてんごう）万智は一人なのにお父さんは万智の花嫁姿が見たかったのだろう

万智 なに なにお父さん

父 おけつがかゆいよ

父はとうとう、万智に「一緒に死のう」と言えなかった。二つめの月に照らされた不幸な世界に娘を一人置いてゆくことを、父は悔やんだ。父は壁をすり抜けて出ていく。一人残された万智。慟哭。

万智 お父さん 玄関から出てってよ

山の中。武は掘り起こした雪子の頭部に触れていた。

武 生首だ

母 雪子 ここにいるの

母が、武の地面にそろえた膝元に寝転がっていた。武はものすごく驚いた。身体全体の筋肉を圧縮させて宙に浮かび、それから尻もちをついた。

武 あんた あなた誰ですか誰ですか

母 セミよ

武 セミ セミさん

母 あなた誰ですかよ

武 俺は 武です

母 武って誰よ

武 誰ですかね 俺 俺なんなんすかね 俺雪子のなんだったんすかね

母 なんでもない きっとただの葬式男よ

武 葬式男ってなんだ

母 家族でも友達でも恋人でもペットでもない儀式に助かるただの生贄よ 姉弟でもクラスメイトでも恋敵でも隣の人もアヒルでも政治家でも憧れでも人間でもないただの生贄よ

武 人間は人間は人間はにんげブン…

武はその場にくずおれる。

母 あなたもう人間じゃないわよ 二つめの月を見たのだから 人間なんて もうこの星の上にはいないわよ

母、雪子の頭部へ寄り添い、

母 ねえ雪子 どこにいるの ひとりでいるのは寒いわよ お母さんね あの虫かごの中で聞いた あなたの
おうたが聞きたいの ねえ雪子 あなたのお顔が見たいのよ

三田万智の家の近くの公園。万智は、母に吸い殻にされたクワガタを見つめていた。

万智 お母さん どこ行ったの お父さん死んじゃったよ ねえお母さん 夫婦なんだよ どこ行ったの

誰の返事もない。万智は、スマホを出し、電話をかけた。

線路。着信音が響く。多喜男はスマホを出して電話をとった。

多喜男 はい

万智 お姉ちゃん

多喜男 はい

万智 お姉ちゃんお願い すぐに帰ってきて 大変なことになってるの お願いお姉ちゃん え

多喜男 はい

万智 どちらさまですか

多喜男 あの多喜男です 雪子の夫です

万智 多喜男さん

多喜男 はい多喜男です どうしました

万智 お姉ちゃんいませんか ちよつとこっち大變で

多喜男 あの お姉ちゃんはちよつと

万智 あのお願いですお姉ちゃんにすぐに帰ってきてほしって言ってもらえませんか本当にこっち大變で私ちよつとどうしたらいいか分かんなくって あ

多喜男 はい

万智 こんな夜中にごめんなさい

多喜男 いえ

万智 でも本当にこっち大變で私ちよつとどうしたらいいか分かんなくってそれでお姉ちゃんに今すぐに帰ってきてほしって今すぐ私思っててそれなのにごめんなさい多喜男さんがお姉ちゃんの電話に出ちゃって私もうどうしたらいいか分かんなくって あ でも多喜男さん多喜男さんが電話出たことを悪く言ったんでは決してないんです悪く言ったわけじゃないんです

多喜男 あの 何がありました

万智 えあの えあの 落ちて聞いて聞いてくださいなんというか 父と母がセミになって母の頭のセミをとつたら母が動かなくなつて父が本当はうそゼミだったことを打ち明けた途端に倒れて起きてどこか行っちゃつて多分もう多分もう壁が 壁を 壁を あのそれでお母さんいなくなつちやっただんです え 私落ちて着いてます

多喜男 はい 努力は認めてあげ…

万智 え 多喜男さんなんでお姉ちゃんの携帯持つてるんですか

多喜男 はい あの…

万智 え ごめんなさい夫婦って普通そうなんですか 携帯交換して持つてるんですか じゃあ多喜男さんの携帯は今お姉ちゃんが持つてるんですか

多喜男 あの…

万智 じゃあお姉ちゃんに電話したかったら私多喜男さんの電話番号をお姉ちゃんに聞いてでもお姉ちゃんに聞くためにはお姉ちゃんの携帯に私電話するじゃないですか今みたいにしたら多喜男さんが出てやっぱりお姉ちゃんが持つてる多喜男さんの電話番号私聞けなくないですか え 多喜男さんに多喜男さんの携帯電話の番号聞くのだからそれって普通じゃないですか

多喜男 あの…

万智 あ 個人情報の取り扱い云々とは別次元の話で

多喜男 はい

万智 え 多喜男さん多喜男さんの電話番号教えてください

多喜男 聞いてください

万智 はい教えてください

多喜男 雪子が死にました

多喜男がなんだか懐かしい名前を言った。万智を、雪子の思い出が貫いた。

雪子 万智 お葬式しよ

万智 今日はいいよ

雪子 お葬式は待ってくれないよ

万智 そんなの嘘の葬式だよ

雪子 嘘のお葬式なんてないよ

万智 誰も死んでないよ

雪子 死んでるよ

万智 え

雪子 いつも誰か死んでるよ

万智 知らない人でしょう

雪子 知らない人だって 誰かの知っている人でしょう

万智 お姉ちゃんも私も知らない人よ

雪子 万智だって 誰かの知らない人でしょう

万智 お姉ちゃんは私を知っているでしょう

雪子 私万智のこと知ってるよ

万智 そうよ

雪子 泣き虫さん

万智は姉が生きているのか分からなくなった。ふと空を見上げてしまったからだ。二つめの月が輝いている。一つめの月と二つめの月が並んで輝いて、万智は何かを錯覚した。

万智 今 どこにいますか

多喜男 線路ですわ

万智 電車のですか

多喜男 電車のですわ

万智 お姉ちゃんのお家の近くですか

多喜男 お家の近くですわ

万智 今から会いに行つていいですか

多喜男 はい

万智 私ちよつと分かつて 多分今私一人でいぢやいけないやつなんで

多喜男 そつちに行きましようか

万智 ううん どこでもいい場所ですわ

多喜男 はい

万智 探します またお願いします

多喜男 はい

万智は電話を切つた。歩き出した。

線路。多喜男は電話を切つた。

淳 え ご家族に言つてなかつたの

多喜男 まだ生きてるか死んだか分かんないから

淳 免許証見つかつたんでしょ

多喜男 でもなんか身体とか他の人と混じつてよく分からんつて警察の人も言つてたから

淳 さつき木の枝見つけたじゃん

多喜男 いやまだ枝だから

淳 妻さんの血付いてたじゃん

多喜男 だからまだ血だから木の枝に血付いてたつてそれだけだから

淳 あんたさ死んだ人間の立場で話すとよ

多喜男 多分死になんてしょ

淳 多分死にの立場で話すとよ 家族にも言えないってどういう状況

多喜男 へ

淳 生きててほしいんなら生きてるって言えよ 死んでた方が安心するなら死んでるって言えよ

多喜男 あんた家族になんて言ったんだよ

淳 へ 俺

多喜男 あんた死んでからお父さんお母さんになんて言ったんだよ

淳 俺一人暮らしでなんも言ってないよ まだ俺のこと生きてると思ってるよみんな

多喜男 じゃ今すぐ伝えてこいよ俺死にましたって

淳 伝えられるかよ俺は

多喜男 生きてる人間の立場で話すとよ

淳 俺は実の息子だぞ

多喜男 死んだんなら死んだってはっきり言ってほしいんだって頼むから

淳 そんなの

多喜男 あんた今すぐ実家帰って伝えてこいよ頼むから

淳 え ちょっと考えさせて

多喜男 ごめん

多喜男は線路のどこかに謝った。

多喜男 え 俺今「ごめん」て言った

淳 うん言った

多喜男 なんで

二つめの月に照らされた生きている多喜男が、淳には死んだ人間に見えた。

淳 さあ

山の中。武は起き上がった。立ち上がった。

武 え あ そうか

武は周りの木々を見た。

武 カチ

武は地面に埋まっている雪子の頭部を見た。

武 カチ これでいい雪子 設定

武はしゃがんで、雪子の頭部の傍らにあるスコップを手にとって、眺めた。

武 カチ

あの時。思い出雪子が話しかけてくる。(思い出雪子は万智役と母役が交互に、もしくは同時に台詞を発する)

思い出雪子 あの

武 はい

思い出雪子 一緒にスコップ見に行きませんか

武 え スコップ 映画

思い出雪子 映画じゃなくて道具 道具のスコップ

武 え すごい 意味分かんない え 俺ら知り合いじゃないよね

思い出雪子 昨日二つめの月の試しびかりがあったでしょう

武 うん

思い出雪子 あれ見てスコップ欲しくありませんでした

武 まあ お昼おごってくれるならいいけど

あの時。武と思い出雪子、ホームセンターへ行く。

武 すごい 今も昔もスコップって代わり映えしないね

思い出雪子 小さめがいいと思うよ 山まで持ってくんだし

武 それさ 田んぼとかじゃだめなの

思い出雪子 あなた死んだら山と田んぼどっちがいい

武 俺海かな

思い出雪子 海は一人で死ぬところよ 山はみんなで死ぬところ

武 どこも一人だと思っけどな

思い出雪子 これになさいよ

武 あんた寂しい人なの

思い出雪子 え

武 なんで俺に声をかけたの

思い出雪子 私の心 宇宙に溶けちゃったのよ

武 宇宙に溶けたってさ 死ぬこたないよ

思い出雪子 死ぬの私

武 あんた家族とかいるんじゃないの

思い出雪子 嫌なら付き合わなくていいよ

武 え 誕生日いつ

思い出雪子 九月九日

武 え もうすぐじゃん だったらそこまで生きてみてさ 俺誕生日プレゼント買ってあげるよ

思い出雪子 私ね

武 うん

思い出雪子 今お財布ないの

武 え スコップまさかの俺払い

思い出雪子 誕生日プレゼントにしてよ

武、まだ焦点の定まらない目でスコップをあやつり土を掘り始める。

雪子 あなたお名前なんていうの

武 たけ

雪子 武 二文字だけ

武 二文字だけ

雪子 たけ

武 うん

雪子 私の方がごめんね 死体を運ぶだなんて私 本当にやってくれる人いるんだって思った

武 俺も本当に死体運ぶだなんて思ってなかった

雪子 でもやってくれたんだね

武 あんた名前は

雪子 私 ゆきこ

武 ゆきこ

雪子 うん 三文字だけ

武 うん

武は山の土をスコップで掘る。やがて夜になった。周りには誰もいなかった。武は、スコップに「設定」出来なかった。

武 俺まだ終わってないんじゃないかな雪子の葬式

武は山をさまよいます。以降、武は山のおちこちで白い花を見つける。武は白い花を、雪子の足跡をたどるよ
うに拾っていく。

線路。多喜男と淳の前に母が立っている。

母 あらこんばんは

多喜男　こんばんは

母　お久しぶりです多喜男さん

多喜男　ご無沙汰してます

母　こんなところで何されてるの

多喜男　え　あの散歩というか

母　あらお散歩　いいわねえ

多喜男　え　お義母さんはなんでこんなところ

母　私　私はねえ雪子を探してるのよ　さっきから雪子の身体を巡ってあっちこっち飛んでるんだけど肝心の本体がないのよ

多喜男　え　万智さんから何かうかがいました

母　万智から　え　万智とお話したの

多喜男　今電話がかかってきて

母　なにか言っていましたあの子

多喜男　いやあのなんか動揺してるみたいでお義母さんのセミがどうかよく分かんないんですけど

母　そうですか

淳　あの

淳は母の頭の上を見ている。

母　はい

淳　あのすみません　頭に何か付いてますよ

母　あ　これ

淳　え　セミじゃないですかこいつ

淳はセミをとろうとする。

母　あ　ちょっとやめてくださる

淳　え　でもセミですよ

母　いいのいいのこれ私の本体ですからこのままで

淳 え でもセミですよ

母 いいのいいのほんとにいいの

淳 え でもセミですよ

母 いいのいいのいいのいいの

淳 え でもセミですよ

母 いいのいいのいいのいいの

淳 え でもセミですよ

母 いいのいいのいいのいいの

淳 え でもセミでプン…

淳はその場にくずおれた。

多喜男 え

母 ほんとにねえ といって言ってるのに

多喜男 え 大丈夫

母 大丈夫かしらねふふ あなたたちどちらにしたってもう二つめの月に照らされてるのだから

多喜男 え

母 ある意味大丈夫じゃないんじゃない

多喜男 え

淳が起き上がった。

淳 え なに今の 痛ってえ 痛くないけど

母 …

淳 え なに今の 痛ったくないけど痛ってえ

母 …

淳 なんか今すごい大きなむプン…

淳はその場にくずおれた。また起き上がった。

淳 え なになに俺今どうなってるの え あんたなんか高速で俺のこと殴ってない そんなにセミとるのプン…

淳はその場にくずおれて起き上がった。

淳 え だから え やっぱあんただよねなにも捕らないからセミもういいでブン…

淳はもうその場にくずおれずに耐えてる。

淳 だからもうなになんだって

淳はちょっと逃げ腰になって、ちょっと逃げ始めて、母がそれを追い始めたので逃げた。

淳 え なに なに なに なに

淳は線路をまっすぐ逃げていく。母が追いかけてくる。追いかける手のひらがひらひらとしている。セミの思いつきと人の身体が混同しているのか。母は両手をひらひらさせて、飛ぶように追いかけてくる。

母 生きてるの 死んでるの 生きてるの 死んでるの 生きてるの 死んでるの 生きてるの 死んでるの

母の異形に淳はとても恐ろしくなった。母に殺されると淳は思った。淳は自分が死んでいると分かっていた。でも殺されると思った。枕木につまづいて、淳は線路に倒れた。そこへ母がやって来た。淳は泣いていた。母も泣いていた。

母 雪子どこにいるの

多喜男は線路に取り残されていた。母の雪子を求める声が多喜男にも聞こえた気がした。多喜男だけでなく街

のあちこちで人の生活にひずみが出てきているように多喜男は思った。雪子がひずみに挟まって、多喜男を待っている気がした。例えば山の中で…。

山の中で、武は雪子の頭部に白い花を添えた。「雪子は雪子の設定した人に会えたのだろうか」武は何に花を添えているのか分からなくなった。雪子の設定した人は、どこで何をしているんだろうか。

線路。「びしゅいーん」とかっこいい音が響いた。多喜男の持つ機械の棒の先端が万智に反応して万智のお腹にくっついている。いつの間にか万智が多喜男の目の前に立っていたのだ。多喜男は我に返り、万智にどこから触れたらいいかあやふやな説明を始めた。

多喜男 あ の これDNAくっつき装置っていつて登録するとなんかおんなじDNAを持つやつをくっつけるっていう まあ誤作動起こしてますけど今

万智 はい

多喜男 まあ はい この機械に登録して はい

万智 お姉ちゃん探してるんですか

多喜男 はい

万智 見つかりましたお姉ちゃん

多喜男 あ の これ

多喜男は木の枝をポケットから出す。

万智 これ お姉ちゃんの

多喜男 木の枝です

万智 お姉ちゃんの木の枝

多喜男 あ いえ 普通の木の枝 普通の木の枝に多分ちょっと雪子の血が付いてるんじゃないかって

万智 血 付いてたんですね

多喜男 あ の 三日くらい前から雪子いなくなって見つからなくて それで一昨日くらいに警察の人来て免許証見つかりましたって

万智 はい

多喜男 免許証が 免許証だけ

万智は何か気づいた。多喜男の表情が万智に姉の居所を教えてくれたのだ。でもきつと、多喜男にそれを伝えても多喜男は分かってくれない。姉と私にしか分からない場所。万智は機械の棒の先端に触れる。自分に反

万智 お姉ちゃんね

多喜男 はい

万智 小さい頃からかくれんぼ得意なんですよ

多喜男 え

万智 絶対に見つかからないって言ってコココーラのトラックの上乗って隣の市まで隠れに行ってたんですよ

多喜男 かくれんぼ

万智 あの姉は手の込んだことさせるとすごいですよ

多喜男 え かくれんぼってなに

万智 見つけてほしいんじゃないですか かくれんぼだったら

万智は多喜男を見つめた。多喜男は万智の表情に雪子の名残を見た。万智と雪子の混同した過去現在の思い出。多喜男と雪子の家の庭。少し離れたところで雪子、洗濯機に手を置いて眺めている。

雪子 ああ

多喜男 どうしたの

雪子 洗濯機壊れた

多喜男 え 洗ってくれないの

雪子 なんかすごいとこ取れてるの

多喜男 え どこすごいとこって

雪子 ほらこの部品

多喜男 え すごいじゃんそれ そんな部品どこついていたの

雪子 なんか広くなったね

多喜男 え

雪子 洗濯槽の中 星空がきれいよ

多喜男 星空

雪子 ほら プレアデスの鎖が見える

多喜男 洗濯槽に

雪子 ほら 小熊のおでこの先に

多喜男 何が見えてるの

雪子 星空の目当てが見える

多喜男 雪子

雪子 今度多喜男と喧嘩したら私ここに隠れるね

多喜男 え 修理出さないの

雪子 私のこと見つけてね

多喜男 修理出そうよ

雪子 優しい声して見つけてね

「びしゅいーん」とかっこいい音がして、思い出が溶けた。機械の先端がいつの間にか万智のお腹に触れている。

多喜男 あ 誤作動で これ

万智 誤作動ですか

多喜男 え

万智 ほら 私にも見える

多喜男 なんです

万智 星空が北も南もひとかたまりになって

多喜男 え

万智 お姉ちゃん ここに埋められてるんじゃないですか

電車の音がする。

多喜男 あ 電車来ますよ

多喜男、線路脇に逃げる。万智動かない。

多喜男 掃除の電車来ますよ

万智動かない。電車の音大きくなる。

多喜男 掃除の電車きますよ

万智動かない。電車が来た。線路を走った。多喜男の目の前を通り過ぎた。電車の音が小さくなった。聞こえなくなった。万智の身体が夜闇に溶けた。転がっているはずだ。多喜男はそれを見つけようとする。機械の棒の先端を八方に向ける。喘ぎ声が聴こえる。それは自分で発したものだ。やがて「びしゅいーん」とかっこいい音がした。機械の先端の夜に、何かがかくつついている。

山の中。武はいつまでも無くならない花を摘んでいる。

武 花って結構あるね 俺死んだからかな 花のことすごい見えるようになったよ

武、花を雪子の頭部の埋まっているところに置く。

雪子2 ありがとう

武 え

雪子2が武のそばにたたずんでいる。

武 雪子

雪子2 私雪子じゃないよ 雪子マークツィだよ

武 え マークツィ 雪子じゃないの

雪子2 雪子マークツィだよ

武 雪子マークツィとは

雪子2 雪子マークツィは本当の雪子がさすがに武に悪いことしたなって感じた懺悔の心から生まれたのよ

武 俺なんにも悪いことされてないよ 自分で決めて山の中入ったんだよ

雪子2 武 私のことはもう十分 その摘んできたお花 今度は武の葬式で使ってあげて

武 雪子

雪子2 私は雪子マークツ―

武 雪子 雪子は俺のことどう思ってた

雪子2 本当の雪子は武のことちょっと息臭いなって思ってた

武 え

雪子2 あとすごいいい人だなって思ってた

武 え 俺息臭かった

雪子2 ちょっとね 一般成人男性の平均くらいの臭さね

武 え 言ってよそれ

雪子2 それ思ってたの本当の雪子の方ね マークツ―はそんなこと全然思っていない 本当だよ

武 俺今も臭い

雪子2 え 臭くない

武 本当

雪子2 本当

武 隠してない

雪子2 だって武死んでるから

武 あ

雪子2 これからどうする

武 え

雪子2 武 今度は武が設定しないとイケないよ

武 設定

雪子2 死んだ命は誰かの重力に向かって設定しないとイケないよ でないと宇宙の迷子になっちゃうよ

武 誰に設定したらいい 雪子

雪子2 私は雪子マークツ―

武 雪子に設定してもいい

雪子2 あの

武 うん

雪子2 雪子は設定を拒否しました

武は白目になった。

雪子2 ごめんなさい

武 謝んなよ殺すぞ

雪子2 自暴自棄にならないで

武 なってねえよ殺すぞ

雪子2 でも早く設定しないと宇宙の迷子になっちゃうよ

武 迷子なんかなるか殺すぞ

突然真つ暗になる。武はすつとどこかに落下している。

武 え ごめん なにこれごめん え 俺今迷子 迷子 ここ え 宇宙 宇宙 ごめん 「殺すぞ」って言い
たかっただけごめん もう「殺すぞ」言いません 許してください ごめんなさい

空も地上も、全部が星で埋め尽くされている。武はその中に、渡り鳥のような一群をみとめた。それはセミだった。

あさにおきて よるにねむる

よるになかないこと つきのいんりよくは おなかのくうどうに ふたんがかかりすぎるのです

わかいじゅもくをえらばないこと えだがかたいと たまごをうむのにつらいのです

ありにきをつけること ありはわたしのなきがらだけでなく ときにきからおちたあかんぼもつれてゆく

じゅもくにうまれて つちにしぬ

こうびをすること おとこのこはきちんとなくこと おんなのこはみみをすますこと かならずあなたにぴ
つたりのこうびともだちがみつかります

こうびをすること さほうは そのときがくればわかるのです

こうびをすること こうびをおえれば もうそらにかえることはありません

つちのなかでのさんぜんにち たのしかったね あたたかだったね そらはなにいろなんだろう たくさん
おもいえがいたね

つちのなかでのさんぜんにち たのしかったね あたたかだったね かぜにどれだけのれるだろう たくさ

んおもいえがいたね

つちのなかでのさんぜんにち たのしかったね あたたかだったね おかあさんのみたけしき たくさんおもいえがいたね

あしのかぎをまるめておくこと なるだけおいしくたべてもらえるように

めをとじること そのときがくれば わかるのです

星の隙間の暗闇から、淳が逃げてくる。母が来る。武には雪子を求める者たちが一緒くたになって見え始めた。

母 雪子 雪子 あなた 生きているの 死んでいるの 二つめの月なんて造るからよ あなたたちこのまま宇宙の迷子になるわ 宇宙の迷子 生きているのか死んでいるのか分からない 宇宙の迷子 はるなつあきふゆ休まる時を知らないで 宇宙の迷子 星座のようにせわしく日々に働いて 宇宙の迷子 朝に起きて夜に眠って 宇宙の迷子 夜がだんだん短くなって 宇宙の迷子 夜がとうとうなくなって 宇宙の迷子 生きているのか死んでいるのか知らないまま 宇宙にははじめから 夜なんてなかったことに気が付いて

多喜男 お義母さん 万智さんが

母 え

多喜男 万智さんが電車にひかれました

母 万智が

多喜男 はい

母 雪子が

多喜男 はい

母 万智が

多喜男 はい

母 雪子が

多喜男 はい

母 電車に

多喜男 はい

母 あらそう

母は移動する。夜の線路はどこまでも続いていく。万智の欠片はどこに散らばっているのか分からない。母はセミの装置を使おうとするが、分からない。セミと一緒にになって、あんなに明るかった夜が、真っ暗になった。

淳は死んでいる。ここにはもう多喜男しかいなかったのだ。淳、線路の先へ歩いていく。多喜男、淳を見送る。それから倒れている母を見る。母に機械の先端をあてる。「びしゅいーん」とかっこいい音がする。武は宇宙の隙間からその光景を覗いている。雪子の設定した人が分かった。

雪子 星を見ること 目を閉じて 星を見ること 目を閉じて その大きさに身体をゆだねること 二つめの月は私たちに鋭い望遠鏡を与えてくれたのです 私たちは今どこにいるのか 明るくてきれいな場所は本当にここだけなのか ベテルギウスが星の爆発を終えて二万年 オリオンは右肩をなくし 別の何かの名前になった 新しい星のあかぼ出来るころ 私たち ベテルギウス跡地にたどり着く

明るくなる。ここは夜の山の中。武はどこまで真っ暗を漂っていたのか。ふるえる。雪子2が見守っていた。

武 あ

雪子2 宇宙の迷子になるよ

武 ごめんなさい俺迷子なりたくないですどうしたらいいですか

雪子2 だったら設定をするの 武の大事なもの 大事な人を思い浮かべて

武 大事なもの 俺の大事なもの プレステ4 プレステ4 かな俺の大事なもの

雪子2 それにする

武 え いいのプレステ4で

雪子2 雪子マークツの個人的な意見でいえば寂しい人生だったわね

武 俺やめるプレステ4やめる 俺 あの 大事な人 大事な人にする 大事な人 あれ

武には誰も思い浮かばない。

雪子2 拒否しない人にしてね

雪子2が慈しみをこめた言葉で武に話しかける。俺を拒否した女の顔で。

武 拒否しない人拒否しない人 え 俺のこと拒否しない人って誰 え いないんじゃない俺拒否しない人

おおい 俺を拒否しない人 俺を 拒否しない ひと 俺を 拒否 しない ひと

雪子2 うう(泣く)

武 え 泣かないでくれる

雪子2 (泣く)

武 ちょっと

雪子2 (泣く)

武 ちょっと

雪子2 (泣く)

武 泣くな殺すぞ

また真っ暗になった。

武 あ

線路。万智、起き上がる。傍らに母が死んでいる。母が私にたどり着いてくれている。

万智 カチ ふふ

万智は二つめの月を見る。手探りで、二つめの生の感触を探る。

万智 カチ 月がきれいね

万智はどこかを見る。

万智 月がきれいね お姉ちゃん

雪子を求めると、雪子がいる。

雪子 万智 見て

雪子の足元に、セミの亡骸（に見立てた花）が咲いている。万智、雪子に駆け寄る。

万智 みんなセミ

雪子 みんな道路に転がっていたのよ

万智 死んでるの

雪子 生きてるのか死んでるのか分かんないよね

万智 うん

雪子 分かんないけど 鳴かなくなったよね

万智 うん

雪子 私だから代わりに泣いてあげたいの

万智 うん

雪子 万智もやる

万智 うん

雪子、カンペを渡す。

万智 なにこれ

雪子 カンペ

万智 え これ ほたるのひかり

雪子 うん

万智 セミだよ

雪子 いいの

雪子歌う。

ほーたーるのーひーかーりーなーぞーのー…

万智　なんか変だよ

姉と妹で、くすぐすと笑う。雪子うたう。母のセミだったセミが、飛んでいる。蝶々のように、ほたるのように、セミの身体で。やがて、姉妹の足元の、土に落ち着く。

ほたるのひかり

なぞのゆき

ふみふみマッサージ　あなたのとくいわざ

てがみをかさねて　わらわれて

でもあなたかかさず　おへんじえもじつき

万智も一緒にうたう。

ほたるのひかり　なぞのゆき

ふりむきわたし　わかれゆく

万智と雪子、セミの亡骸に、母の亡骸に、土をかける。

線路。多喜男はじつと、棒を自身の歩く方に傾けて歩いていた。朝靄の露か汗か涙か、何が自分の頬を撫でているのか分からない。「びしゅいーん」とかっこいい音が鳴る。機械の先端に何か付いている。枝じゃない。多喜男はそれを拾い上げる。小指だった。

多喜男　これ　ゆび

駅。武がホームで電車を待っている。そこへ淳がやってくる。二人、ちらっと見合う。やがて、

淳　あの

武　はい

淳 始発までですよ

武 あ はい もう少しですね

淳 ありがとうございます

武 はい

淳 あの

武 はい

淳 花

武 え

淳 花きれいですね

武 ああ きれいでしょ

淳 あの死んでます

武 え はい え あなた

淳 死んでます

武 え 俺も俺も

淳 え 死んでます死んでます

武 死んでる死んでる

淳 うわよかった 俺だけかと思っただすよ

武 え あなた設定まだ出来てない人

淳 え あなたも

武 うわ俺も俺も

淳 え 何やってるんすか何やってるんすか

武 何やってるんすか何やってるんすか え 今からどこ行くんです

淳 いやあの 実家に帰ろうかなと

武 ええ 一緒一緒 え 実家どこですか

淳 あ 俺福井なんで

武 ええ 一緒一緒 ええすごい一緒に帰ろ

淳 帰りましょ帰りましょ

武 うわ良かった 俺めっちゃ心細くて

淳 俺もそうなんですよ

武 え もう

武、泣く。淳も泣く。武、持っていた花束を線路にばら撒く。もうこの世界では、花くらいで駅員は電車をとめない。

武 帰りましょ

淳 帰りましょ

武 電車もうすぐですね

淳 そうですね

線路。多喜男は小指に何か埋め込まれているのに気づく。それを剥がそうとするが、血が固まって剥がれない。

多喜男 雪子

多喜男の中で、雪子、振り向く。

多喜男 これ 遺書だろ

多喜男の中で、雪子、うなづく。

多喜男 なんかもう 血が固まって読めないよこれ

多喜男の中で、雪子驚く。驚いた拍子に、雪子は自分の持っていた自分の頭部を落としてしまう。ゴン。雪子、多喜男の傍により、その小指をバラバラにしようとするが、出来ない。

多喜男 こんなダイナミックなことするからだよ

雪子しょげている。多喜男は、雪子が好きだから、

多喜男　なんて書いてあるの

雪子は、頭がないから、うまく喋れない。

雪子　あ　あ　あ

多喜男はレールに腰をおろし、雪子を待っている。雪子は言葉を紡げない自分が悔しい。

雪子　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ

多喜男　そう

多喜男は分かってくれている。雪子は少し照れた声になった。

雪子　ああああ　ああ　あああ　あああああ　あああああ

多喜男　雪子

名前を呼んでくれた多喜男に、雪子はこたえる。

雪子　あ

多喜男　おかえり

朝が近い。

おわり